



梅原龍三郎旧蔵の大津絵「鬼念仏」(個人蔵)。シンポジウムでは梅原の大津絵コレクションについても語られる

ピカソやミロも愛した

大津絵 初の国際シンポ

江戸時代から350年以上続く庶民絵画「大津絵」をテーマに、地元滋賀や京都の研究者たちが8、9日、初の国際シンポジウムを東京・日仏会館で開く。ピカソやミロも愛した大津絵は国際的にも知られていたが、美術史など学術領域では扱われてこなかった。研究者たちは「国際的に大津絵研究を発展させるチャンス」と期待をかける。

京滋の研究者、8日から東京で

シンポは、大津絵を調査研究する大津市歴史博物館学芸員の横谷賢一郎さん、日仏会館・フランス国立日本研究センター所長のクリストフ・マルケさん、京都精華大非常勤講師の鈴木堅弘さんらが中心となり計画した。

研究者計14人が登壇する。スペイン・バルセロナ博物館学芸員のリカル・ブルさんは、19世紀末から20世紀初頭に大津絵が伝わった欧州で、ミロら画

家に与えた影響などを考察。鈴木さんは、歌舞伎「傾城反魂香」に大津絵師浮世又平として登場する岩佐又兵衛と大津絵の起源について、芸能文化の視点から発表する。ほかの研究者も、京都画壇や梅原龍三郎の近代日本洋画家との関わりなど、多様な角度から探る。

大津絵が学術研究の対象になりにくかった一因は、贋作が多いこと。横谷さんは「多くは目の前で実演して描か

れるなど、素早い筆の動きで、技巧的でありながら雑。贋作ほど丁寧に律義に線を引いている」と、真贋を見分けるポイントを公開し、研究の進展につなげる。「いずれフランスで展覧会をしたい」と、本格的な大津絵の世界デビューを思い描いている。

シンポは聴講無料。事前申し込みが必要。日仏会館フランス事務所☎03(5421)7641。(河村亮)

大津絵 江戸初期、仏画から始まりたともいわれ、東海道大津宿かいわいで、土産物として売られた。鬼や七福神、ネコ、ネズミのキャラクターをすばやくゆるい筆の線で描いた。宗教、道徳、風刺的な画題が含まれる。大正から昭和初期、民芸運動の柳宗悦が再評価してブランド的古美術となり、贋作も出回った。欧州では画家や研究者、コレクターが愛好し、ピカソも愛蔵した。



バルセロナの日本民芸展を訪れたジョアン・ミロ。大津絵が飾られている(J・ゴミス撮影、1950年、個人蔵)